

生き方としての“外科医”

まるい ゆうじ
丸井 祐二 先生
碑文谷病院（目黒区）

↑ 院長という立場の難しさと楽しさを語った丸井先生。

碑文谷病院は、都立大学駅と大岡山駅のちょうど中間地点の、閑静な住宅街を10分ほど進んだ、環七通り沿いにあります。病院長で協会目黒支部長を務めておられる丸井祐二先生を訪ねました。

■ ブラック・ジャックに憧れて

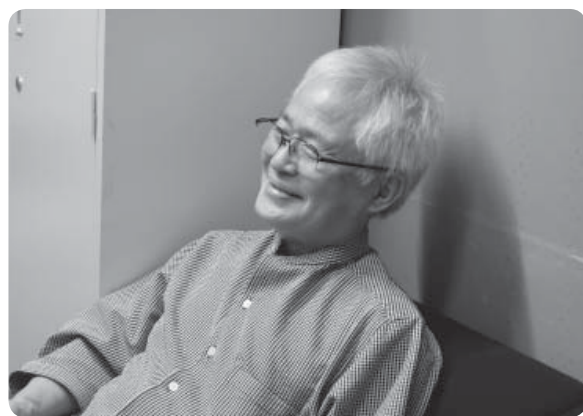
外科医をめざしたきっかけは、小学生のときに読んだ漫画「ブラック・ジャック」だった。そこで描かれていた医師の姿は、半分正しくて半分正しくなかったと感じている。半分は、職業としての外科医というよりは、自分自身の生き方として「外科医」の道を選んだことは正しかった。正しくなかったというのは——手術で得られる報酬は大金ではなく、患者さんの回復を近くで見届けられることが喜びであるということだった。

■ 恩師の死に直面する

外科に進んだのち、移植外科の道を選んだ。移植手術はいわば最終手段。移植が最後の砦であるからこそ携わりたいという、強い使命感にかられてのことだった。

中学の恩師が病に倒れて亡くなり、ブラック・ジャックのように、医師がどんな病気も治せるわけではないことも思い知った。

小学生で剣道を始め、医師になった後も



↑ インタビューする吉田副部長。

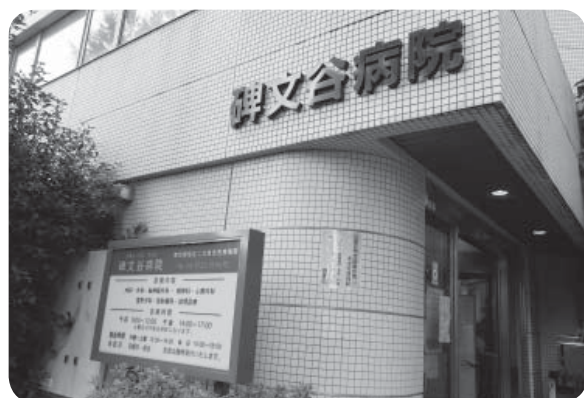
地元の先輩を頼り道場に足を運んだこともある（2段とのこと）。中学の担任で剣道部の顧問であった恩師は、中学に入って間もない、未熟だった自分の人格形成をしてくれた特別な存在。医師として力になれなかったことがもどかしかった。

■ 移植外科への道

名古屋大学医学部を卒業し、研修医を岡崎市民病院で開始した。その後の外科修行中に、名古屋大学で第1例目の小児肝臓移植が行われることを聞きつけて卒後6年で母校へ。臓器移植は、臓器を提供するドナーと受け取るレシピエントがいて、それぞれが重要な役割を担っている。ドナーの善意を一番に、なんとしても手術を成功させなければならないという思いで、綿密な準備がなされていく様子を見て「自分も仲間に加わりたい」と強く感じた。

当時は大学病院内のしがらみが多かったのに、第二外科（移植外科）と第一外科（小児外科）の教授が手を組むという、一大プロジェクトの成功に立ち会えたことは誇らしかった。

これが臓器移植の第一歩であった。



↑ 病院の入り口。



↑ ブラック・ジャックの布が掛けられている。

その後、名古屋大学小児外科に入局し、京都大学、ニュージーランド、虎の門病院、聖マリアンナ医科大学、そして東京へと、曲がりくねった移植外科の道を歩いてきた。

■ 院長としての難しさ、不十分な診療報酬

2024年4月に碑文谷病院の院長に就任された。医療界に限らずだが、専門職も事務職も、人手を確保するのにとても苦労する時代だ。派遣先を転々とする職員もいると聞く。一緒に働いてくれる仲間として信頼関係を一から築くには時間が必要で、お互いの良いところ、悪いところを受け入れて補い合っこそ、強くてよい組織ができる。しかし、簡単に転職を促す風潮が、医療組織を悪化させ、ひいては患者さん方の大きな不利益につながっていると思うと、語られた。

現在の診療報酬は、厳しい諸物価高騰に追いついていない一方、診療報酬の引き上げは、患者さんの窓口負担を増やすことでもある。ただ、そもそも現行の医療制度自体が、医師や看護師、医療者のいわば自己

犠牲の上に成り立ってきた。今こそ、本当の意味で働き方改革を進めるよいタイミングなのだろう。

■ 元看護師の奥様とご家族と

院長室の扉に掛かっている「YOU ARE ALWAYS WELCOME」のボードは、「ちいかわ」のハチワレを模して丸井先生が作ったものだそうで、奥様がお好きなのだとか。

そんな奥様は、結婚を機に看護師の職を離れていたが、今はホスピタル・クラウン（病院へ行って入院中の子どもたちに対してパフォーマンスをしているクラウン＝道化師）をやっている。しかも、看護師としても、防災士としても活躍しておられる！ 二人のお子さんもそれぞれの道を進んでおられるとのこと。

■ 協会に期待すること

診療所の医師と病院長とで環境は大きく異なる。病院には医師が複数いて、多くのスタッフがいて、何かと相談できる人たちがいるが、多くの開業医の先生方は診療も医院経営も一人で背負わなくてはならない。「本当に大変なことだと思います」

たとえば何か問題が生じたとき協会に相談すれば一緒に考えてくれる、寄り添ってくれる、そういう存在はとても貴重だ。

また、そこから一步も二歩も踏み出して、われわれがめざす医療を継続していくために必要なこと、よりよい医療を続けるためにどのような役割を担うべきか。医療者、患者さん、双方にとってよりよい医療を実現していけたらどんなに素晴らしいだろう。



↑ 院長室の扉には手作りのボードが。

■ 移植者スポーツに携わって

帰りがけに、夏休みの思い出を伺った。丸井先生は、世界移植者スポーツ大会連盟（WTGF）の日本代表理事として、ドイツで開催された世界移植者スポーツ大会に参加されたそう。大会では、丸井先生が名古屋大学小児外科の頃にお世話していた患者さんが見事準優勝して、表彰台でメダルをかけてあげることができた。いかにも嬉しそうに語る様子がとても印象に残っている。

■ アルペンスキーが好き

生まれも育ちも名古屋の先生、根っからのドラキチ（中日ドラゴンズのファン）であることも教えてくれた。「中日球場」の頃から通っていたという。

そんな先生の一歩の得意スポーツは、剣道や野球よりも、大学競技スキー部から続けているアルペンスキーだ。「大学生活は、学業そっちのけで山に通ってスキーに励んでいた」という。だが今や、スキーの後は身体のあちこちが痛くなるそう（笑）。

明るくて、何に対しても全力投球な丸井先生が、スタッフ・患者さん・関係者の皆さんを引っ張っていく姿が目につく。

（吉田 章＝本誌編集部副部長）